

『太か男』 後編

今日 あした

前編のあらすじ

九頭家くづつぐみは、父親が亡くなり、母親と長男・大まこと、次男・繁しげる、三男・光ひかる、長女・菊、次女・花の六人家族になった。物語は次男の繁が語る形で展開する。

兄の大は魚屋や料亭を経営する実業家。妻は松子。弟の光は東京帝国大学に入学して東京に住んでいる。妹の菊は村役場に勤めている。花はまだ女学生である。

儂、繁は、夜間大学を卒業し、高等文官試験に合格して官吏になる。宮崎に転勤となり松子の妹の桃子と結婚。長男・隆夫と、次男・康夫が生まれる。

兄、大には商才があり店を次々に拡げていた。だが親分肌で周りから頼られるとつい気が大きくなり、湯水のごとく金をばら撒いている。

繁は、東京転勤となり宮崎を引き払う段になって給料が差し押さえられていた。大が繁を保証人にして役所から借金をしたのだった。

『太か男』 後編

繁はたまげてしもうた。どげんしたらこげなことが出来るつちやろうか。

役所の帰りに、出店したばかりの兄の料理屋に怒り心頭で飛び込んだ。

「兄さん、儂の給料が差し押さえられとった。どけんしたとね」

「お前こそ、どげんしたとね、顔色ば変えて……」

「兄さんが借金したからち、儂の給料が出んとよ」

「そうじゃったかあ、山本はほんとうに差し押さえたつか……悪かった。すぐに役所の分は山本に払うから、心配せんで待ってとつてくれ」

「山本っち、兄さんが懇意にしとる県庁の人じゃなかとね。どげんこつなつちよるとね」

「山本とん、ちつとの行き違いじゃが、心配せんでんよか」

「役所の分は山本さんにとって、そんなに方々に借金をしとるとね。この新しい料理屋の借金ね」

「もうよかろうが、明日には給料が入るごつ手配しておくけん」

「儂は商売のことはようわからんけど、借金をせんばならんじゃったら、桃子が何か無心しよつても聞かんてよかとよ」

「桃子？ 何を小まいことを言うるとか、桃子ん方がお前より余程腹が座っ

とるが……。もう何も言わんでよか、せからしか！」

翌日役所に行くと、経理部の山本さんに呼ばれて給料袋を渡された。

「今朝、九頭さんから、いやお兄様の方から県庁へお支払いがありましたので……」

「兄がご迷惑をおかけしちよるのでしょうが……。儂の給料を抵当に入れたって、どげんこつでしょう。儂の知らんところでそげんこつが、でくるとでしようか」

「いやー、お兄様がやっておられる県庁の食堂の家賃が未払いになっていますので催促をしましたら、新たに開店した料理屋の資金繰りが大変なので、立て替えておいてくれと言われました。ですが……。私に払えるような額ではございません。そこで、県庁に出向なさっていらつしやる九頭繁さんに保証人になっていただくことで、県の了承を得ました。ところが、その手続きの前に九頭さんが農林省に帰られることになったので……。役所の手前、急に取り立てるようなことになってしまつて、こちらこそご迷惑をおかけしました。」

今日は九頭課長の送別会を菊水でされるそうで、私も呼ばれています。名残惜しいことですが、ご挨拶は後ほどにして……。いやあ、いいお兄様じゃないですか」

「はあ」

繁は事情を聞いても狐につままれたような気持ちはぬぐえず、羽振りの良過ぎる兄に言いようのない不安を抱いた。偉大な兄に対して持った初めての感覚だった。

桃子と結婚してから初めての東京での生活が始まった。と言つても、兄の大きが、転勤が決まった時から采配を振るい、帝国大学に通っている光に、借家の手配から引越しの段取りまで任せてあった。

家に着いた時には荷物も大方片付いて至れり尽くせりである。桃子は宮崎から持ってきた総菜で手際よく昼食の準備をして、四人で食卓を囲んだ。

四人というのは、儂、弟の光、妻の桃子、それに三歳になったばかりの長男の隆夫である。まだ赤ん坊の康夫はおいて来たのだ。

「兄さん、慣れない東京ば行って、隆夫と赤ん坊の康夫の世話は、一人ではようしきれん、兄さんの所に置いて行つても良いじゃろう」と交渉したのだ。

「なんば言うとか、子供の世話をすると母親の役目じゃろうが」儂が言うと、

「あーよかよか、松子が見てくれるじゃろうから安心して置いていったらよか」

「松子義姉さんは忙しいのに、申し訳なか」
「繁さん、よかですよ。兄さんもいっぺんに皆行ってしまったら寂しかとですよ」。と又もや、桃子の思い通りになったのだった。

昼食が終わって一段落した時、光がやおら膝を正して、
「兄さん、義姉さん、僕もここに住んでも良いじゃろうか、二階の奥の部屋は廊下を隔てて離れになつとるからあの部屋を使わせてもろうて……」

「学生寮はどげんすつとか？」繁が困ったように訊いた。

「大兄さんに頼まれて、少し前から片付けやら何やらでここに住んどつたらすつかり気に入つて、学生寮は引き払つてもうた」

「ここに來たら桃子にこき使われて、勉強するどころじゃのうなるが……、やめとけ」

「私はかまわんよ。繁さん何を言いなさるとね、光さんが好きなようにしたらよか」と桃子。

「義姉さん、ありがとうございます。兄さん、義姉さんの手伝いをするんば何でもなかよ」。

「手伝いなんかせんでもよか、四年生なんじゃからちゃんと勉強して卒業せんにゃ」。

繁は、『光、お前は桃子のことが解つたらんからそげんこつを言うていられるのじゃが……』という言葉を飲み込んだ。

こんな風にして、高円寺の借家での四人暮らしが始まった。

繁は定刻より三十分早く役所に行き、定刻通りに家に帰る。桃子は晩酌を用意していて、繁だけ一品多くおかずが付く。大学四年生の光は昼間は大学に行き、夕食を済ませると自分の部屋に入って勉強をする、というごく当たり前の生活のスタートである。

桃子は東京での暮らしにすぐに馴染み、井戸端会議で色々な情報を仕入れて来る。

中でも高島屋呉服店の噂を聞いた時には、目をらんらんと輝かせ、月給日の翌日に早速行つて来た。そして日本橋界隈の賑わいに興奮しながら

「せっかく東京に來たつちやから、これからは毎月、高島屋に行くわ、姉さんにも垢抜けした洋服なんか見繕つて送ることにせんと……」と息巻いた。

光はと言えば、勉強も忙しいのに、日が経つほどに、家にいると隆夫の守を押し付けられるようになった。隆夫はすっかり光に懐いている。光とて、かわい盛りの甥が可愛くて仕方がない。桃子はそんな様子を見計らつて、

「光さん、デパートに行くときは隆夫を置いて行きたいとやけど、見といて下

さらんでしょうか」と言い出したそうだ。光でん、

「義姉さん、何も遠慮せんでん、日にちさえわかっとなれば、家に居りますけん言うてください」と、桃子ペース。

言わんこっちゃない！

桃子はここでも何もかもを自分の思い通りにしている。

繁から見ると、桃子は都合よく、夫の兄は自分の兄、夫の弟は自分の弟と決めてかかり、兄に甘え、弟を上手に懐柔している。

兄も弟も嫌な顔一つせず、桃子のわがまま放題を受け入れてくれている。

桃子の方が、役者が一枚も二枚も上手なのだ。もう何も言うまい、繁は又しても存分に無力感を味わった。

時は昭和十五年、日中事変はまだくすぶり続けており、ヨーロッパでは第二次世界大戦が始まっていた。そんな中でも大は弟たちの住む高円寺に度々食料を送ってくれた。

そして翌十六年には光が東京帝国大学工学部を卒業、内務省国土局に入省した。

その年の十二月、日本の真珠湾攻撃を皮切りに、太平洋戦争が始まった。

翌、昭和十七年、戦争に突入して間もない正月二日、日本軍はマニラを占領。新聞には勝利の記事が大々的に書かれ日本中が沸いた。

その頃、高円寺の九頭家では、内務省に入ったばかりの光に縁談が持ち上がった。相手は宮崎の素封家、黒田さんの娘で貴子さんという。光は入省して間がないので、東京で見合いをして話ほとんどん拍子に進み、秋には宮崎で結婚式をすることが決まった。

「兄貴は喜んどのだろうなあ、結婚式は新しくできた料理屋でするんじやろうか」繁が言うと、桃子は、

「久しぶりに帰れるとじゃね」と夢見心地だった。

ところが、結婚式の招待状が来ると、式場は宮崎に最近できたばかりのホテルで、招待されたのは繁だけだった。遠いし、幼い子もいるので気を利かせたのだろうが……桃子は「なんで兄嫁の私を呼ばんとじゃろうか」と膨れた。

結婚式は、代議士や土地の名士が居並び盛大に行われたが、すべて黒田さん側が取り仕切って、大の出る幕はなかったそうだ。

繁は、光の身内として母、兄夫婦、妹二人と共に列席したのだが、賑やかなことが好きな兄が、おとなしく座っているのが気の毒だった。

それは、親代々の土地の名士の黒田さんと、今では名士と言われてはいるも

の、成り上がり者の料亭の親父とでは格が違うのだろうか……。

光夫婦は、繁の住んでいる高円寺から省線で二駅先の荻窪に新居を構えたので、少し落ち着いた頃、桃子と隆夫を連れて祝いに行った。

あっさりとした門構えの瀟洒な家で、通り一遍の挨拶を済ませると、桃子は初めて見る光の嫁さんに興味津々である。

「貴子さんは東京には初めて来なさったのですか」

「いいえ、母と何度か参りました」

「貴子さんは宮崎の方と聞いとりましたが、東京弁が上手かそうですね」

「はい、母が東京出身なので家では標準語を話していました」

「……………」

「義姉さんも、東京に住んどつたらすぐに東京弁になりますよ」

光が横から言葉をはさんだ。

「そいでん、東京は不案内でしょう、日本橋なんかなら案内できますけん、遠慮なく言つて下さい」と桃子。

貴子は、助け舟を求めるように光を見た。

「何を言うとか、光でん案内するが」

横から繁があわてて桃子を制した。

「そいでん、女同士の方が楽しいこともあるとよ」

桃子なりに気を使っているようだったが、貴子はおっとり構えていて、何を言つてもしつくりとかみ合わない。それでも、用意してあった牛鍋をみんなで囲んで腹いっぱいになって家路についた。

光夫婦とはその後も半年ほど互いの家を行き来していたが、光の方から繁に「家族同士の付き合いはもう終わりにしよう」と言ってきた。

「貴子が、桃子さんのように我儘な人は見たことがない。もう限界ですつて言うんじや」

「そりやあ桃子は誰もが認める我儘だが、貴子さんは何がそんなに気に障ったんじやろうか」、繁が聞くと、

光は、もううんざりだとばかりに、

「義姉さんは、儂のことを自分の弟でもないのに手下のようにこき使こうとるち言うんじや『あなただっついやな顔一つしないで、隆夫ちゃんのお守を押し付けられても嬉しそうに鼻の下を伸ばしちやって……』って、憎々し気に言いはるとよ。兄さん、君子危うきに近寄らずじや。俺たちが兄弟をやめるわけじやないとじゃから」

昭和十八年になると、空襲警報にサイレンが採用され、けたたましい音が聞こえるようになり、電力や電灯の使用も規制されるようになった。繁にもいつ召集令状が来るかわからない。こんな時でも大は、東京に来る人がいると聞くと、食料を持たせてくれる。それには親子三人には十分なほど、魚や野菜の煮つけが入っていて、食料も調味料も手に入りにくいご時世、繁はこれでしばらくはひもじい思いをせずにいられると、兄に手を合わせるのだが……：桃子に渡した途端、自分たちの分は半分くらいとっておいて、後は気前よく、班長さん、組長さんに配ってしまおう。呆れ返って、

「せっかく宮崎から苦勞して届けてくれたつに、兄貴に申し訳なか」と言うと、「繁さん、何ば言いなさるとですか、お金や食べ物も天下のまわりもの」なによ。気前よく配ればまた戻って来よります。義兄さんじゃて、こうしなさるんじやなかとですか」

「兄貴は商売人じゃ。給料取りは使こうたら無くなってしまう」

「うんにゃあ、なくなりません」

そんな諍いをしながらも、繁は桃子には舌を巻いている。物を配ることで、電灯の使用、隣組の共同作業など十分に優遇されている。

これなら自分が戦争に行っても大丈夫だろう、と思った矢先、

「今度の赤ちゃんも、宮崎で産みます」。桃子が言い出した。

予定日は九月三十日、まだ三か月ある。戦争もどうなるかわからない。疎開するには今が一番良いのかも知れないと思い、出張で小倉に行く同僚がいたので、桃子と隆夫を同行させてくれるように頼んだ。

桃子と隆夫が行ってからしばらくして、繁に召集令状が来た。一週間以内に指定の病院で健康診断を受けるように書かれている。

繁は健康には自信があるし、戦争に行く覚悟もできていた。だが、結果は入隊免除。肺に影があったのだ。自覚症状は何もなかったが、役所の同僚が肺炎に罹っていたのを知らず、一緒に飲みに行く度に桃子のいない気楽さで、家に泊めていたのだった。

その後も結核を発症することはない、大きな声では言えんが、こういうのを幸運というのだろうか、と思いつつ役所に休暇願と宮崎への転勤願を提出して受け入れられた。

戦争中に生まれた女の子は百合子と名付けた。九頭繁と、九頭桃子の間の長女である。母親似の美少女だった。桃子は、アクセサリーのようにいつもそばに置いていた。

大は、軍の仕事をしていたので、兵隊には行かないで済むと思っていたが、

いよいよ戦局があやしくなってから召集された。だがすぐに終戦となり、無事に帰って来た。

光も無事復員したので、男兄弟三人示し合わせて生まれ故郷の野島に行き、長女、菊一家と同居している母親に無事の帰還を報告した。

大は相変わらず自分では飲まない酒と料理を準備して、一日のほとんどを寝て過ごしているという母親や、繁、光にも、しきりに酒を勧めていた。

戦争の一番の被害者は松子だった。大学生で徴兵猶予だった悠太が、戦況の悪化で昭和十九年には徴兵年齢が引き下げられ出陣した。次男の磯吉は幼い頃、はやり病で亡くなっているのです。悠太はたった一人の息子である。

戦死の報告が来たのは、終戦から半年もたつてのことだった。沖繩で終戦を迎えた悠太の一隊は、敗北を受け入れ難く、名誉の自決をしたのだ。

松子にとっては、泣いても泣ききれないことだった。

昭和二十二年、繁と桃子との間に四人目の子が生まれた。女の子で薫と名付けた。戦後も終わり、世の中がまた前向きになった頃である。

薫はおとなしい、愚図らない子だった。まだはつきりとものが見えない目が真ん中に寄っている。

「繁さん、薫の目はなんかおかしいごつありませんか」

「なんも、おかしくないじゃろうが、まだ物がはつきり見えんとじゃ」

桃子は産後の肥立ちも良く、ひと月もしないうちに床上げをしたものの、手放して喜ぶ気になれないようだ。それでも何とか気持ちを切り替えなければと思つたのだろう。

「繁さん、明日は大安だから百合子と四人で写真館に行きましょうよ」と言い出した。隆夫と康夫はまだ兄の家に預けたままである。

翌日、写真館では、繁と百合子が後ろに立ち、桃子が薫を抱いている写真を一枚、それから、薫が一人で写っている写真を一枚撮った。

出来上がった写真を見ると、薫の目は完全に真ん中に寄っている。

「ねえ、私の子は不具じゃなかと……、こげな写真、誰にも見せられん」

「なんが不具か、可愛いじゃないか」

「ちゃんと見ちゃって、この目は真ん中に寄つとるでしょう。こんなん、誰にも見せられん」

「桃子が気に入らんとじゃったら、四人で写つとる、これを配ったらよか」

四人の写真は、抱かれた赤ん坊がはつきりとは映っていなかった。

それから桃子の鬱々とした日々が始まった。

美少女の百合子を自慢げに連れ歩いてきた桃子は、今では隠れるように外出

している。怖いもの知らずの我儘者で、何でも手に入れていた桃子が憂鬱そうに沈んでいる。あんなに大事にしていた長男の隆夫を松子に預けたままで迎えに行こうともしない。

こんな桃子を見るのは初めてじゃ。桃子は神経衰弱になったとじやろうか。なんで神経衰弱にならんといかんのじやろうか。あの何でも自分の思い通りにしていた桃子はどこに行ったのじやろ。

家じゅうが暗くなり、百合子までが表情をなくして、時折母の様子を伺っている。何とかせにやならん。

そう思っていたら、県内の高鍋に転勤になった。

今度は百合子まで松子に預け、赤ん坊だけを連れての転居である。子供三人を預かる松子も、

「子供のことは心配せんでん良いから、桃子、ちゃんと薫にお乳をやらんといかんよ。桃子がしっかりせんとどうにもなりやせんが」と心配を隠せない。

桃子は皆に心配されながら魂が抜けたような面持ちで高鍋に附いて来た。

薫は生後十か月になっていた。

両手を前に出し、勢いで五歩六歩と歩いてはストーンと尻もちをつく、愛らしい薫の仕草を、桃子の焦点の定まらない目が捉えているはずなのに、相変わらず無表情である。

桃子は鏡台の前に座って自分の顔を見ながら心の内に語りかけていたそうだ。

薫は生まれたその時からハンディキャップを背負って生きて行かなければならない運命なんじやわ。まわりから「寄り目」とからかわれ、馬鹿にされながら一生を過ごす。薫には楽しいことなんか一つもないとよ。兄弟だって……、康夫は義兄さんと松子姉さんの子供にして籍もいれてもらわんと……。隆夫と百合子は、不具の妹をもって、陰口をきかれながら、いじめられながら、結婚だつて出来ないに決まっとる。

いつそ、このナイフで薫を殺して、私も死んでしまおう。この子さえいなければ誰からも後ろ指を指さるることはなか。

そう思いながらナイフを手にとって刃をじつと見つめたり、二つに折って閉じてみたり、無意識に開閉したり、鏡に顔を近づけて自分の目をのぞき込んだり。そしてナイフを鏡台の上に置いて、放心状態で畳に後ろ手をついて顎を上げ、天井を見たり……。

と、その時、ハツと我に返ったそうだ。

薫がナイフの蓋を開けて口に入れている。鏡の横にぺたんと座って両手でナ

イフを持っている。あっと思った瞬間、薫は舌にあてた刃をグイっと引いたのだ。血があたりに飛び散った。それからギャーッという泣き声が響き渡った。

繁が役所から帰って家に入るか入らないかで「ギャーッ」という薫の叫び声が聞こえた。駆け込んで目に入ったナイフを薫が手から引き剥がした。傍らで腑抜けのようになっていた桃子に、

「何をしちよるとか。お前はそれでん母親か！」

と言いながら、桃子のほっぺたにびんたを食らわせた。

「医者と呼ばにや、うんにや、医者に行くぞ」。

無我夢中で、まだ朦朧としている桃子の手を引き、片手で薫を抱いて医者に走った。

医者は痛み止めを注射して

「口の中だから、しばらくかかるだろうが自然に治りますよ。心配はいりません」と言ってくれた。

「よかったー」

桃子が張りつめていたものを吐き出すように言った。その時には正気に戻っているようだった。

家に着くと桃子は鏡台の前に投げ出されているナイフを手に取り、

「薫ちゃん、こんなものをお口に入れてはいけませんよ」と、薫の頭をちよんちよんと指先で叩いた。

それを見て繁は、桃子はもう大丈夫じゃろう、と思った。もう自己中心の桃子に戻るとる。

薫はしばらくの間、おっぱいを飲むときも、離乳食を食べる時も顔をしかめていたが、不思議に泣かなかった。

顔をしかめながらも無心におっぱいを飲む薫、人肌に冷ました食べ物を小さな口を開けて、痛そうな顔をしながらも食べてくれる薫を見ながら、桃子の神経衰弱は急速に治った。

昭和二十四年六月、昭和天皇が全国を巡幸された。

宮崎に来られた時に、兄嫁の松子は天皇陛下にお茶を出す係に選ばれた。とても名誉なことで、松子にとっては悲しみばかりが多かった日々の中の一瞬の輝きだった。

繁一家は、戦争中の療養生活を含めて十年間宮崎県にいた。

康夫はすっかり大の息子になっていた。大は康夫が生まれてからすぐに傍に

置き「お父さん」と呼ばせていた。少し大きくなると手を引いて家の前の大淀川で泳ぎを教え、二号さんの家に行くときも、いつも一緒に連れて行ったそう。今では康夫だけでなく隆夫と百合子も大の家に預けられ、ここで県立の付属小学校に通っていた。そして大は小学校のPTA会長になり、先生方を毎日のように料亭に招いていた。

これが、大流の子供の可愛がり方だったのだ。

その後、繁は東京転勤になったが、隆夫と康夫はそのまま残して付属に通わせることにした。又しても兄弟は離れ離れで、東京は農等夫婦と長女百合子、次女薫の四人暮らしとなった。

やがて恐れていた時が来た。大の手広く広げていた商売がにっちもさっちもいなくなつたのだ。債権者が押し寄せていると聞いて、繁は役所に休暇願を出して宮崎に飛んで行った。隆夫は高校生に、康夫は中学生になっていた。

大の店は結局、料理屋や旅館を全部手放し、最初に市内で始めた魚屋だけを残して、松子が必死で守っていたが、繁が駆けつけた時にはその魚屋さえ差し押さえられていた。

繁は、兄を通して知り合った十年來の友人に藁にもすがる思いで借金を頼み込んだ。

「兄の所がもうどうにもならんごつなりました。莫大な借金ですが、自分が必ず返すつもりでいます。どうかしばらくの間、私に貸してもらえないでしょうか」

家族ぐるみの付き合いをしていた友人は、

「兄さんは剛毅な性格で面倒見もよか人じゃから、儂も随分世話になりました。足を向けて寝られんほどの恩義も受けておるんじゃけんど、今の兄さんに貸したら共倒れになるじゃろう。繁さん、あんたに貸します。兄さんを助けてやって下さい」そう言って引き受けてくれたのだ。

「繁さんは昔のまんまじゃ、丸メガネは掛けとらんけど、無口で石橋を叩いて渡る性格はちつとも変つとらん。公務員のあるたにしてみれば想像を絶する額だろう」と言い「それでも繁さんなら……」と、その莫大な負債の肩代わりが出来るだけの金を貸してくれたのだった。身に余る言葉に涙がこぼれた。

子供たちを東京に連れて帰る時はつらかった。とりわけ康夫はここで育つたのだ。大は、もう少し康夫が大きくなっていれば、事業に失敗しなければ、康夫を後継ぎにしたかったのだろうに……。

大の商売が破綻した頃、繁と光の方は好機が巡って来ていた。二人とも役所

勤めをしていたが、期を同じくして民間企業に望まれて転職したのだ。給料は倍になった。

あの我儘な桃子は、時々ヒステリーを起こしながらも、突然四人になった子供の教育をし、給料の中から借金を返し続けた。

「義兄さんには、返しても返しきれんほど世話になつとります、こん位なんでもなか」と言つて……。

そんな時でも高島屋にだけは、給料日の次の日に欠かさず行つて、今では自分の物を買うのではなく端切れをたくさん買いこんで、家族中の洋服をミシンを踏んで縫っていた。

大は、心労も崇つてか、軽い脳溢血になり自由に体を動かせなくなると、宮崎の市内で小さな借家に住み、シャキシャキした松子に怒られたり、面倒を見たりしてもらいながら、好きな野球とプロレスをラジオで聞くのを楽しみに日を送った。時には不自由な体で東京に出てきたりして……。

繁も光も、社会的に認められ、それぞれの仕事に打ち込んだ。家族ぐるみの付き合いはなかったが、社会に出ると珍しい名前なので、

「丸頭さんという方を存じていますよ」と言われることがある。

「繁は私の兄ですよ」

「光は私の弟ですよ」

と、それぞれが応え、

「ほー、お顔は似ておられますが、タイプが全然違いますね」

と、言われるのを面白がっていた。

光は長兄の大に似て面倒見がよく、剛毅な性格だった。

繁が企業に勤め、上り詰めることが出来たのは、自身の努力もさることながら、キャリアの弟の恩恵もあつたことだろう。

兄弟三人は母の臨終で久しぶりに故郷に帰つた。

母は、その場に居合わせた者と一人ずつ目を合わせ、静かに目を閉じた。七十八歳の大往生だった。

母の葬儀を終え、繁と光で大を両側から支えながら兄弟三人、裏山に登つた。鬼の洗濯岩はずいぶん狭くなつていたが、視界いっぱい広がる海は昔とちつとも変わらない。

「兄弟仲良う、こん海がごつ太か男に……か」

父が言った言葉を光が声に出して言い、三人は顔を見合せて笑つた。時折思い出すこの言葉を三人とも肝に銘じて生きて来たのだ。 完（9754字）